
連れ去られた友人

シャコのパンチは水槽も破る

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連れ去られた友人

【Nコード】

N9341S

【作者名】

シャコのパンチは水槽も破る

【あらすじ】

「宇宙人と交信ができる」
大学の友人、増田がそんな信憑性のかけらもない噂を鵜呑みにし、確かめようと言い出した
しかし彼はそれきり姿を見せなくなった

噂（前書き）

暗がりってなんで怖いんでしょうか？そこに何かあるかわからないから怖いんだと思います

赤ちゃんはなぜ人見知りをするのでしょうか？その人が自分に害をなす人間なのかそうでないのかわからないからだと思います
恐怖ってそういう「わからない」から来てると思うんです

この作品で「わからない」「恐怖を表現できればいいな」と思っています

噂

その漫画喫茶のある部屋では宇宙人と交信ができる。

大学の食堂で昼食の牛丼をかつこんでいたとき、増田が興奮ぎみにそう語った。僕はそれは誰から聞いた話なんだと問う。すると「友達からだけど、そいつも友達から聞いたらしく、その友達も……」と切りがなさそうなので途中でそれをやめさせた。二十を過ぎた男が小学生のような噂話を真に受けるのはいかななものか。

「その漫喫^{まんきつ}ってどこだと思っ？」

そんな胸中も知らずに増田は言う。答える義理もないので黙っておくと勝手に説明を始めた。

「駅前のパチンコ屋あるじゃん？ あの向かいにあるところだよ」「あそこに漫画喫茶は一軒しかない。それなら「駅前のところ」だと言えはいいものをなぜパチンコ屋を引っ張り出すのか。そいうちいち口にするのも面倒なので「へえ、あそこか」と適当に相づちを打っておいた。

「で、そのの漫喫で、俺の友達の友達の友達の……」

「はいはい。それでお前の友達がどうしたって？」と切らせる。増田はムツとする様子もなく続けた。

「この間の休みに、その友達がその漫喫に漫画を読みに行ったんだけど、その日はいつも使ってる部屋があいていなかった。仕方なく違う部屋を選んだそいつは初め、お目当ての漫画ばかり読んでいたそうなんだが、その部屋にあったパソコンがおかしいことに気がついた」

「おかしいこと？」

「ああ。だいたいの漫喫のパソコンって、前の人が使った痕跡を残さないように全部初期化されるよな。その店もそうだったはずなんだ。だけど何かの手違いか不具合があったのか、『スタート』のボタンがある画面の下にあるあれ、なんだっけ、あれ、そう、タスク

バー。タスクバーに最小化されたウィンドウがあったそうだ」

「それを開いたのか」いつの間にか僕は話に聞き入っていた。それに気を良くしたのか、増田は横に広がった口をさらに歪める。ここまできると口が裂けてしまふのではないか。そんなにやけ顔だ。

「察しがいいな。それを開くと宇宙人と」増田はそこで言葉を切った。もったいぶった物言いにたえきれず、僕は復唱する。「宇宙人と?」

「宇宙人と交信できた、と」

「宇宙人と交信して?」

「これでおしまい」

拍子抜けだ。僕は思わず息をついた。「なんだよ。ここまで引張っておいてそれかよ」

「うるせえ。聞いてないものはしょうがないだろう。その友達はいま行方不明だつて話だからな。いない人間から話を聞くのは無理だ」それはそうだ、と危うく関心しそうになるが踏みとどまる。コップに入っていた水を一気に飲み干した。

「嘘か本当かわからないのか」

「だから俺が確かめるのさ」

増田はそう言うつと空になった食器を乗せたトレーを手に、席を立つ。そして「あ、俺の友達つてのは厳密には違うけどな」とどうでもいような言葉を残して返却口にそれを運びに行った。

それから一週間、増田の顔を見ていない。彼に対して軽いという印象を抱く人は多いが、案外根は真面目で大学の講義を休むことはいまままでに一度しかなかった。

その増田が唯一休んだ日を思い出してみる。たしかちょうど一年前、一年生の秋だった。

体調を崩したであろう増田のために、講義のあと彼の住むアパートへ見舞いに向かった。造りが古くはあるものの駅から近く、周り

にスーパーや映画館、ファーストフード店など、なにからなにまで揃っているそのアパートは家賃が安い。昔、そこに住んでいた誰かが自殺し、その幽霊が出るのではないかともつばら噂になっていた。僕と増田のみの間で。増田はいつだって都市伝説や怪談が好きなのだ。

彼の部屋の前に立ち、インターホンを押す。少したつて中から「ちょっと待って」という声があった。その声色には風邪をひいた様子はなかった、が、どこか疲れているような気がした。続いて「危ねっ」と声を紛らせ、どたどた騒がしい音がする。それがこちらに近づいてくる。やがてドアが開いた。ぼさぼさの頭をして、目の下に黒いくまをつくった増田が現れた。

「グッドタイミングだ。ちょうどいまできたところなんだよ」

どこをどうしたらそんな格好になるのか、一体何ができたのか問いただしたかったが、そう言うなり増田は僕の手を掴んで部屋の中へと引きずり込んだ。

狭い部屋いっぱい均一の大きさをした棒状の木片がいくつも並んでいる。「見てろ」と僕に言い付け、増田はその脇にしゃがみ込んだ。そして木片の一つを指で弾き、倒す。するとそれが隣に立つ木片に倒れこみ、倒れる。さらにそのまた隣の木片も同じように将棋倒しに倒れていく。それは線を描き、円を描き、倒れていく。すべての木片が倒れたとき、僕は息をのんだ。

「おめでとっ」

増田はドミノで作られた五文字を声に出した。

三日三晩、何度も誤って倒しては直し、直してはまた誤って倒し、それを繰り返したという。さっきも危うく倒してしまいそうになり、「危ねっ」が口を突いて出たのかもしれない。

今日に間に合わせるために、食事も風呂も睡眠も講義も、なにとも忘れてドミノを並べたらしい。だが、当初の目的は忘れていなかったと増田は安堵した。

「誕生日、おめでとっ」

増田は床に寝転がり、うわごとのように言ったきり動かなくなつた。

あのときのように僕にサプライズを仕掛けるために増田は姿をくらましていたのだろうか。僕の誕生日まではあと三日。それより一週間も前からいないのだからきつと去年より手の込んだことをするためにいないだけだ。そうに違いない。

そう思いながら増田のアパートへ足を進めた。

対面

玄関から出てきた増田は僕の顔を見るとわずかに眉を上げたがそれ以上の反応は見せず、何も声を出さずにくるりと背を向けた。部屋の中に戻っていく増田からは覇気が感じられない。これまで何かの準備をしていて、言葉を口にするのも億劫なほどに疲れているのか。

しかし何も聞かずに放っておくのは気が引ける。どうも徹夜でドミノを並べていたようには見えないのだ。

他の何かがある。そうとしか思えない。

扉は開け放したままなので「中に入れ」ということなのだろう。いままで幾度も増田の部屋に入ったことはある。ここに入るときはいつもなんの気兼ねもなかった。だが、なぜかいまはこの入り口が不気味に思えてたまらない。まるで全てを飲み込みまんと大口を開ける大蛇のようだ。その大蛇の口に自ら飛び込むことは愚かだと、頭の片隅で誰かが必死に呼びかけている。だが、不思議と逃げる気が起きない。足を踏み入れる、というより、足が吸いよせられる。そう、吸い込まれるように僕は部屋へと入ってしまった。

ドミノが並べられているようなことはまるでなかった。木の机、そこに乗るノートパソコン、ベッド。いつもとまるで変わらない、少なくともそれらの配置は。

昼間だというのに雨戸は締め切られ、照明もついていない。パソコンの画面が発する無機質な光のみが部屋を照らしている。

増田がふらふら歩きながらベッドに近づき、そこに座った。そしてひとつ息をつく。テーブルを挟んだ反対側の床に、隅にあった座布団を敷いて僕も腰を下ろした。

薄暗い部屋の中、俯く増田の顔はよく見えないが、なんだかやつれている気がする。

「何か、あったのか」

僕がたずねると増田はわずかに首を揺らした。

「あれか。宇宙人と交信したんだろう」

少しふざけてみた。だが増田は笑う様子もなく、またもうなずく。こいつはこんなにも冗談が通じないような奴だっただろうか。しかし、もしかしたらこのおかしな態度も増田の冗談かもしれない。その可能性も視野にいれながら問いつめていこう。

「どこの星の何星人と交信したんだ。火星人？」

首を横に振って否定する増田。ノー、ということか。

「金星人？」

ノー。

「じゃあ水星人？」

またノー。

「土星人？」

ちよつと間をおいて、ノー。

「なら太陽系の外の人が」

やはりノー、と思いきやイエス。やっと増田が肯定した。どんな星の人だったんだ、ときこうとするが、ここにきて初めて増田が口を開いた。

「M78星雲」

「というと？」

「光の国」

「ああ…… ウルトラマンの故郷ね」

思わず肩を落とした。やはり増田は僕をからかっているのだ。

そう思っていると、増田がゆっくり顔を上げた。くまはないが、真面目な表情をしている。冗談を言っているようには見えない。

「彼らは俺に真理を授けてくれた」

真顔でそんなことを言い出す増田。いつもなら「厨二病をこじらせるなよ」と言っただけで小突いてやりたいところだが様子が様子なのでそれもできない。僕は仕方なく「どんな？」と返す。しかし増田は「俺達はなんで生きているんだろう」とか「結局、意味がなかった

のかもしれない」とぶつぶつ独り言を言い始めた。まるで会話にならない。会話のドッジボールだ。

目が宙を泳いでいる。増田には、部屋の天井の向こうに広がる空、宇宙のかなたにいる「彼ら」が見えるのだろうか。僕はいいよ本気でそう疑い始めた。

それから増田は例の漫画喫茶での宇宙人との交信の次第を淡々と語っていった。部屋に入ってから数時間、夜の九時を回っても終わりが見えないので、僕は腰を上げた。

僕がもう帰る、と告げると増田は最後に次のような言葉を投げた。

「その漫画喫茶のある部屋では宇宙人と交信ができる」

そういえばこの話の詳細を増田が聞いていなかったのは、失踪したという「友達」もこの言葉しか残さなかったからなのかもしれない。それに気付いた瞬間、増田のその言葉が最期の言葉のようにしお思えなくなってしまった。この部屋から出ればもう二度と増田に会えないのではないか。無性に怖くなってきた。

いいや、そんなはずはない。僕は自分にそう言い聞かせて増田に「講義、さぼるなよ」と言って玄関に向かった。しかしやはり途中で寂しくなり、振り向いて「じゃあな」とだけ言ってやる。増田は右手を上げて、何度か横に揺らした。

きつと明日、平気な顔をしてひょっこり現れるだろう。そうに違いない。

しかし増田と顔を合わせたのはこれが最後になった。

扉の向うは

僕が増田のアパートを訪れてから三日、増田が大学に来なくなつて十日。

増田がEメールで「これより四号室にて最後の交信を始める」というメッセージを僕の携帯電話によこした。それを見た僕はすぐに例の漫画喫茶へ飛んできたのだ。

一体増田はこのことを僕に伝えてどうしたかつたのだろう。「最後の」ということは僕に引き止めてほしいのか。それとも僕にもその交信の様子を見せたかつたのか。はたまた最後に別れを告げたかつたのか。

そんな考えが働いたのは電車を降り、改札をくぐつたあとからだ。ここに来るまではただ「行かなければならない」という使命感で頭がいっぱいだった。その使命感はどこからくるのかはわからないが見えない何かに背中を押されていたのはたしかだ。

増田の家から徒歩十分の距離にある駅の前。そこに建つビル。一階は携帯電話の専門店になっている。そのすぐ上の二階に目指すべき場所はあつた。

どこにでもあるような全国チェーンの漫画喫茶。人類がいままでなしえなかつた（そんなことはない、もうなしえていと言つ人もいるが）地球外生命体との交信が、こんな場所で行われていると思つと馬鹿馬鹿しくなる。信憑性のかけらもないじゃないか。常識的に考えればありえない。

しかし増田は本当のこと（さすがにM78星雲や光の国は嘘だろうが）しか言っていない。僕にはそうとしか思えなかつた。三日前の増田の姿を見てしまったからだ。人知を超えた何かの啓示を受け、暗い部屋の中にただ一人でいるあの姿を。

あれが演技であつたなら、単なる悪ふざけであつたなら。そんなかすかな期待を胸に僕は漫画喫茶の入り口となる階段に足をかけた。

店内は何の変哲もない普通の様子だ。増田の部屋で感じた気味の悪さはまったく感じられない。本当に増田はここにいるだろうか。案の定、四号室はあいていなかった。レジで「どんな人が使っていますか」とたずねると店員は明らかに不審そうな顔をした。

「捜している友達がいるかもしれないんです」

仕方なく事情を話した。もちろん宇宙人のことを口には出さなかったが、しばらく音信不通だった友人がこの店にいるということ伝えると店員は多少不審げな色を残しながらも話してくれた。

「細身で長身、二十歳前後の男性でしたよ」

やはり顔の特徴や細かいところまでは覚えていないようで、その証言はおおまかだったが増田の人物像と一致していた。

それにしてもこういうことを安易に話してしまうのはサービス業においてはまずいのではないだろうか。それでも話してしまうこの店員は人がいいのだろう。

「ありがとうございます」と僕が言うと、店員は「ご友人と再会できるといいですね」と送り出してくれた。

まず五号室に入った。人捜しだとはいえお金も払わずに店に入るには気が引けるので、形の上では四号室のすぐとなりのこの部屋を利用することにしたのだ。

伝票を机の上にそっと置き、それから壁に視線を移した。薄い壁に囲まれた他の何者の干渉も許さない小さく狭い空間。そのうちのひとつ、この壁を隔てた向こう側に増田がいる。

本当のところは怖い、というのが本音だ。四号室にはもしかしたら得体の知れない怪物がいるかもしれない。そんなものに出くわすことになれば僕はとても正気を保っていられない。しかしこのまま増田がどこかに行ってしまうのも嫌だ。最後に言葉を交わすことも顔を見ることができず、気味の悪い不可解なEメールだけを残して去っていく。そんな別れ方はしたくない。

ふとそこで別れ方について考えている自分がいることに気がつい

た。普通なら増田を連れ帰ることができるか否か考えているところだが、僕はそれができないことを前提に頭を動かしている。

(だめだ、だめだ)

思い切りかぶりを振った。いくらか不安が頭からこぼれ落ちていったと思う。

宇宙人が何かよくわからない奴らにあいつをとられてたまるか。

僕は増田と一緒に帰るんだ。あいつは僕の友達なんだから。

五号室から出た。目を移すと四号室の扉がある。そしてその前に立ち、意を決してその扉を開いた。

まんまと騙された友人が部屋に入っていくのを見て、増田は声を殺して笑っていた。

今日は彼の誕生日である。増田は今日のために十日前から演技を続けてきた。ありもしない噂話を吹き込ませ、大学を休み、あたかも本当に自分が宇宙人と交信をしているかのように見せた。そしてまさに今、「ドッキリ大成功」と書かれたプラカードを手に四号室に入ろうとしている。

この日のためにここまでやる自分はどうかしているかもしれない。増田は薄々そう感じていたが、あの友人の驚いた顔を見ることができればここ数日の努力も欠席した講義も惜しくない。

そう考えている間に時計の針が一周してしまった。おかしい。増田がいらないなら彼は一分もしないうちに部屋から出るはずだ。中で何をもちたとやっているのだ。とうとう増田はじれったくなり、四号室の扉を開いた。

「えっ？」

思わず声をあげた。

信じられない。彼がここに入るところはこの目でしっかりと見た。そして四号室の入り口から目を離さなかった。誰か出てくるところ

は見えていない。なのになんで、
「なんで、誰もいないんだ」

扉の向こうは（後書き）

こんなに短いものを終わらせるのにもこんなに労力が必要なのですね…

これはこのサイトで初めて投稿した作品なのですが、読み返すところどころガタガタでした
なので「ここを直した方が良い」「この部分が良かった」といった点があればぜひ教えて下さい
お願いします

そして最後まで読んでいただき、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9341s/>

連れ去られた友人

2011年8月3日03時24分発行